

実践を記述する



ユン ヘヨウン
尹 慧瑛

東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター長補佐／准教授

1 伝えるために書く

どのような現場に、どのような立場でかかわっているとしても、「コーディネーター」に求められる最大公約数としてのスキルは、「つなぐ」と「動かす」ことである。そして、そのために不可欠な行為が「伝える」ことである。

「伝える」手段はさまざまにあるが、ここでは「話す」と「書く」ことについて考えてみたい。「話す」とは、聞き手との相互行為であり、目の前にいる相手とのやりとりを通じて、思いもかけない化学反応が生まれることもある。おそらく実践者の多くは、「話す」ことを通じて「伝える」という場面をより多く経験しているだろう。しかし、そうしたやりとりは一回限りの、聞き手も限られたものとなる。

それに対し「書く」とは、繰り返し、広く読まれるものを創造する行為である。書いたものは後々まで残るが故に、いっそうの熟考が求められるだろうし、そのなかで考えを形にするまでの「省察」が不可欠となる。この、読み手に向けて何をどう伝えるのかだけでなく、そのために自らと向き合う行為こそが、コーディネーターにとっての重要なプロセスになるのである。

2 養成講座でのねらい

目の前に山積する課題への個々の対応に追われてしまいがちな実践者にとって、その実践のあり様を俯瞰し、大きな枠組みや問題意識において位置づけし直すことは、より多くの可能性に向けて自らを鍛えていくことを意味する。そこでは、自分にとっての「問い」は何なのかを改めて見極める必要があるし、その「問い」を表現する言葉および、それに対して「答え」ていくためのさまざまな言葉は、異なる背景を持った人々にも届くものでなければならない。

こうした考えに基づいて、多文化社会コーディネーター養成講座では、その柱のひとつとして受講生に論文執筆を課してきた。まず、初めの4000字レポートでの目標は、「課題を再設定し実践の方向性を探る」ことである。夏期の共通必修科目における講座内容や参考文献を有効に活用しながら、自らの問題意識を明らかにし、課題を整理し、問いを設定することが求められる。このレポートを提出したのち、秋期の専門別科目におけるワークショップやアクションプラン作成を通じて、受講生は具体的な課題の分析やコーディネーションのあり方を検討することになる。そしてそれらを各々の現場に持ち帰り、具体的な実践に落とし込んでいったものを、10000字の小論文に反映させるのである。ここでの目標は、「暗黙知を言語化し実践知として明らかにする」ことである。すなわち、問題意識、現場の課題、問いを明示したうえで、自らの実践のプロセスを記述し、独自のコーディネーター論を展開することが求められている。また、引用やデータの提示、注記の仕方などが適切であるか、全体の構成や文体、レイアウトなど、読み手への配慮がなされているかなど、論文という形式を用いるが故の約束事がきちんと守られているかについても評価の対象となる。

この最終課題の論文を通して、興味深いことが明らかになった。受講生とは半年近くのつきあいになることから、養成講座の運営側は、それぞれの人柄や得意・不得意な分野なども含めて、多面的に「その人」を理解しうる判断材料を持つことになる。しかしながら、書かれたものそれだけで何が伝わってくるかを見たとき、相対的に高いプレゼンテーション能力と比して、大きなギャップを感じるケースが多々あった。例えば第1期生を例にとった場合、論文としての体裁が整っていないものが多く見受けられたのは、受講生の多くが論文を書き慣れていないことからしてある程度予想されたとしても、問いが複数であったり明確でない、前提が長い、実践のプロセス（特にこの半年間の）が書ききれていない、コーディネーターとしての姿が見えてこないなどの評価が多くみられたのである。

(不思議なことに、10000字の論文提出後に同内容に基づいて行われた最終プレゼンテーションでは、こうした問題点はほとんどクリアされていた)。

こうした反省点を踏まえ、第2期の養成講座では、4000字リポートの執筆前に、論文の書き方と講座におけるねらいについて別に時間を設けてレクチャーを行ったが、これはまだ文章を書き始める前から受講生を戸惑わせてしまう結果となってしまった。また第1期では行わなかった4000字リポート評価の開示に際しても、一部の受講生からの異論が出て、さまざまな議論を呼ぶことになった。

3 課題と挑戦

もとより、私たちは養成講座の受講生たちにアカデミックな研究論文を書くことを要請しているのではない。しかしながら、実践を記述することがコーディネーターにとってどのような意味を持つのかについて、運営側と受講生側とが認識を共有しておくことは、今後の講座運営にとっても外すことのできないポイントとなるだろう。だが、実際に書かれた論文を見るならば、そのことの答えはすでに明確に表されているようにも思われる。

実践を記述することにおいて、「問い」は「実践的課題」もしくは「現場課題」であり、「答え」は「課題解決」にあたるが、答えがない、出せないということ



論文の書き方を講義する筆者

もひとつの「答え」である。それぞれのそうした試練のなかで受講者の前に立ち
はだかっていたのは、変容のプロセスに直接かかわっていることの現場性や臨場
感と、それ故の緊張関係を、どのように、どこまで書くことができるかという課
題だった。そこには、実践者ならではの思いを記述にどう織り込むかだけでなく、
実践者としての発話の位置と倫理性にどう向きあうかといったセンシティブな問
題も含まれている。そしてまさにこの点が「実践を記述する」ということにおい
て最も難しく、また、面白いところでもあるだろう。そのような記述が可能にな
ったとき、実践者は「暗黙知を言語化し実践知として明らかにする」ことにまた
一歩近づき、さらにその成果を、同じ問題意識をもちながらそれぞれの現場で試
行錯誤する人々と共有する道をひらくのである。

折しも、多言語・多文化教育研究センターでは、こうした実践者による記述も
含めた多言語・多文化社会にかかわる研究成果の発信のあり方について議論を重
ねていた。そして、養成講座の受講生による投稿論文の受け皿として新たに提示
されたのが「実践型研究論文」というカテゴリーである。

4 何を社会に還元するのか——「実践型研究論文」に向けて

2007年度創刊の『多言語多文化—実践と研究』は、本センターが刊行する査
読つきの研究誌であるが、既存の学問分野の枠組みを超えて多言語・多文化社会
を多面的に理解する視点を提供し、研究者と実践者による研究成果の意義を広く
社会に問いかけ、現場へのフィードバックを行うことを目的としている。本セン
ターでは、新たに設けた「実践型研究論文」を、従来の「研究論文」における方
法論や分析枠組みではとらえきれない、刻一刻と変化する現場での実践を対象と
し、以下に述べる条件に合致したものとして定義している。

- ・ 研究対象の実践活動が論文執筆者自身の経験によるものであること。
- ・ 先行する研究や実践について必要な言及または引用をしながら、現場の状況を客観的に分析し、問題意識と課題が明確に導き出されていること。
- ・ 実践のプロセスが問題にのっとなって記述されていること。
- ・ データ・事例の単なる提示ではなく、意味づけがなされていること。
- ・ 実践活動に伴う変容が記述されていること。
- ・ 課題の解決もしくは改善点に向けて分析がなされていること。

既存の学術ジャーナルでは位置づけが困難であった、「実践者による現場の記述」を真正面から取り上げることで、学術的な研究成果を現場に還元するだけでなく、実践を現場の外にひらいていくためのさまざまな方法を模索したいというのが、本センターの意図するところである。そして、それがどのように可能なのかを、私たちは、養成講座の受講生たちとともに探り、社会に向けてわずかながらでも提示しつつあるのだと信じたい。この短い論稿も、ささやかながら、受講生の皆さんとともにあった私自身にとっての「実践を記述する」試みになっていれば、幸いである。

尹 慧瑛 (ゆん・へよん)

1973年東京生まれ。専門は北アイルランド研究、エスニシティ論。北アイルランド紛争を通じて、暴力と和解、「社会の共有」の問題を考えてきた。在日コリアン3世という自身のアイデンティティーを出発点として、日本の「多文化共生」についても日々さまざまな思いをめぐらせている。東京外国語大学朝鮮語学科卒業。一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了（社会学博士）。